

ハイテンション↑バカップル

アサルトゲーマー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある地区のとある学校！

そこには頭の悪いカップルがいた！

目次

雨には負けず 赤には勝てず	1
素直さやひたむきさ MAX END	6
しなびたエリンギ	11

回答欄のズレには勝てなかった奈央と普通に赤点を取った翔の壮絶な補修が始まる!!

「はいじゃあ補習を始めますよっと」

禿げ頭の先生のけだるげな声。それに反応した奈央と翔はピツと背筋を伸ばした。

「先生！」

「なんですかな」

奈央がバツと手を上げて勢いよく質問する。

「私は解答欄間違えただけなので先生の恩情的なアレコレで補習の免除とかできませんか！」

「できませんよ。一応決まりだからね」

「先生の恩情家！いけおじ！」

「褒めてもだめだからねー」

「じゃあ真面目に聞きます！」

「ノートも取ろうねー」

「今先生の外堀固めが熱い!!」

「静かにしようねー」

「……………!!」

「はいそこ、顔がうるさいよー」

抵抗もそこそこにやりこめられた奈央は変顔マシーンと化した。そんな彼女を見て翔はふっと息を吐く。

「ふふふ…所詮は同じ穴のムジナ…！俺と同じ補習を味わうといい…！」

「灰天くんは赤点多いからスペシャルな奴を用意してるよ」

翔の顔からさっと血の気が引いた。そんな彼を見て奈央がぼんと肩を叩く。

「……………！」

「何か言えし」

彼にほっぺをぐりぐりされても先生の言うことをしっかり守る、よ
い子の鑑の奈央である。

「そこまでだ怪人ども!!お前たちの悪事は僕たちモモタロウ戦隊が許さないぞ!!いくぞみんな!!」

「ワンワン!!」

「……。きじきじー!!」

「えっ?……。サルサルー!!」

「ぶつつけ本番大失敗イエエエエエエエーッ!!」

「キジの鳴き声まったくわかりませんでしたイエエエエエエエエーッ!!」

遊園地のバイト当日。そこには愚かな敗北者たちが居た!!

「なーにをやっておりますのおばかさん!雉の鳴き声は『カー』や『ケーン』でしょう!」

「ごめんね!!」

「でもまあ翔様のフォローはなかなかよかったですわね!今回はそれに免じて減給はなしにしてさしあげます!」

「モッチーさんの美人!雅量!ゴージャス巻き髪!」

「おーっほっほっ!褒めても賃金は等倍ですわよ!」

上機嫌な望子から渡されたひとつずつのポチ袋。二人は顔を見合わせて袋の中を覗いた。

「…あれ。モッチーさん、これって」

奈央が袋から紙幣と共に取り出した一つのチケット。それは遊園

夜。

奈央は自分の部屋でぐったりしていた。彼女の記憶は遊園地を出たあたりからすつぽり抜けており、いつの間にか風呂を済ましてベッドに倒れこんでいる状態だ。

「やっちゃった…。翔さんに、口づけしちゃった…」

頭はふわふわ、視界はぐるぐる。壊れたレコードのように同じセリフを呟き続ける奈央は幸せそうに頬を緩めながら枕に顔をうずめる。

「翔さん大好きいええええーっ。えへへ」

翔さんも私の事を考えていてくれるのかな？奈央は幸せな気持ちで眠りについた。

「奈央大好きイエエエエエエエエエエーっ!!」

なんだか遠くから叫び声が聞こえたような気がした。

受け止めた二人は気合でバーベキューを続けていた!!

「ちよつとまって!!ソーセージどこに消えた!？」

「翔さんさつき食べたでしょ!」

「おじいちゃんじゃねえぞイエエエエエエエエー!」で、奈央食った?」

「実はさつき…たべちゃいました!!」

「じゃあソーセージ追加いくぞおおおおお!!」

「やったー!」

無煙コンロの油除けが機能し、浸水したところで直ぐに排水されてしまうので炭の火力は依然変わりない。

調理中の材料が濡れないよう紙皿を掲げた二人は控えめに言ってもアホっぽかった。

「トドメにホルモン投入イエエエエエエエエー!」

「ころころ焼きイエエエエエエエエー!」



『流石に風邪ひいたぜイエエエエエエエエー!」ゲツホゴホガホー!』

「やーい翔さんの貧弱!!かぜっぴき!!」

『返す言葉もないぜヒヤッホー!』

翌日の日曜日の朝。翔は見事に風邪をひき奈央に電話で連絡を取っていた。

ちなみに奈央はちつとも体調を崩してはいない。

「それじゃあ今から翔さんのおうちに行つて看病しますね!」

『朝ごはんはおかゆでよろしく!!』

「アイサー!では後ほどっ!」

ピ、とスマホの通話を切った奈央。彼女はにたりと笑った後、台所の冷凍庫を漁り始めた。

次の日の学校では机に突っ伏す男子と困惑する巻き髪のお嬢様、あ
と顔をキラキラと輝かせた女子が居たそう。